

280

才

地

奧羽婦人傳

一名窈窕美譚

地

奥羽婦人傳二卷首

協稽姫鑑

復齋神林弼輯

正靜第一

正靜とは心さま身もち正しくすなをよして婦人の操をたもちて
妄動よものになびき移らざるをいふ

女はつねに身もち正しくまた幸ひなくてたぢふれゆくとも心たて
行義いさゝか、わる處からす古歌よ

雪ふりて年のくれぬる時にこうつゐにもみちぬ松も見へけれ
歌の心は雪ふりて年のくる、時よなれはよろつの木もみちせぬは
なし露にうまさればあくれにうみしくれよそまされば霜にうみて
いづれかもみちせぬものなし露にもあくれよ霜にもそまさるも
のは松なりされど露しくれ霜のあゐるまてははもし又色かふるとも
やとみる時とよ雪降て年のくる、時よなりて猶青々としてあれは
扱は遂にもみちせぬ松と見たるやとなり露しくれにたたるをわか

身のさま／＼かなんくろうにあふまたこへ見るへしたこへは我
男家きはめて貧しくてさま／＼のかなんにあへとも少しも其家
をいこへきろふけしきなくわが衣裳手道具なごみなしろかへはて
は頭の髪を切りてうりなごして男をやしなふ程もありても猶わか
心のいろをかへす其家をたもち人ありつゝもみちみゆ松など有
かたき人なり

卑弱第二

卑弱とはたのれを卑下して柔和に青柳の風よなびくが如くい
かよも婉なるをいふ

女として人は人まみゆると城くるしまざるは女の心よあらす我か
近き親類などにはあはてもかなはぬおこありうのやかはたふよ判
逢はぬかよし古歌よ

人の見るそやくるしき女郎花秋霧にのみたちかくるらん

女郎花は歌よも、つはら女のこごよむ此女郎花はかならず秋霧

のたつ折しもさきて霧よのみたちかくる、は人のみる事をくるし
かりてにやこいへり女は何事もこの心にあへし

孝愛第三

孝愛とは父母に孝行をつくし愛敬のあまり他人よ及び虫類畜類
までよも慈愛の心のたよふをいふ

父母舅姑につかふる人はうれよはひたけたまふはかきりの色なり
たごへはて給ふへきけしきならずごも今よもやごたもひくる、日
をれしみて馳走申すへきなり古歌に

ちらねごも兼てう惜きもみち葉は今はかきりの色をみつれば
此歌の心を知るへしもみち十分にそみぬればやがてちるなりいま
はかきりの色ごはすこしものこる所なくうみつくしたるなごさよ
うのもみちを見ればもはやみるほごあるましきこれもふゆへにち
らねごもかねてたしむ心ふかきごなり父母につかふる人こ、をわ
きまへされば生きていまし時はたくさんにのみたもひろく／＼に

してはて給ひてのち悔るなり

和睦 第四

和とは一家の人とよくなれぬ睦やはむつまじくかたろふをいふこれは堪忍の六、ろなければならぬことなり

女は堪忍の心がなによりとなり堪忍の心なければ一家の人と和らきむつまじくすることならぬなり古歌に

玉の緒よたへなば絶ねなからへば忍ぶる六この弱りもそする

玉の緒は命なり忍ぶるはかんにんするとなりかんよんの心なければ義理をもしらず放らつたる程に人間までは有なから鳥けたもれにねなしきなりうれのみならず有徳なる人堪忍此心なければあらぬえようを六のみて身をゆるはし貧なるもの堪忍の心なければゆすみをもすつへし父母舅姑につかふるにもなへての人にまじはるにもこのころなかるへけんや

勤謹 第五

勤とは事をなす身をしなすことめ謹とは身もち正しくつゝしみ物事念を入れることなり

女は父母のものとある時より事をならひ我身をいたはらず又よく謹みありて何とも心を用ひてわろうかますをからす古歌よ

身をすつる人は誠ますつるかは捨ぬ人六うすつるなりけり

このころは身をまつるは事をつめてわか身をいたはらぬなすてめは我身をいたわりつこむへきとも勤めぬなりみをいたはらず勤むる人はみをきてたるやうなれど必ず冥加ありて幸ひはあへは是は捨るにあらざるなりれのが身をのみ大事に取まはす人はみをすてぬやうなれど冥加なくしてあま成ゆく程に是は捨るなり又謹とは身持正しく僧法師など身親しまぬやうとするなり女は宮寺などは勿論親類縁家のものとへもよりくは行かぬことなり是等れこそ唐の文にもくれく記せるなり

儉質 第六

儉質とは物事儉約質素にして偽飾なく謹みふかく外をかこらず
内まもりあるをいふなり

女はたごへ人は無理をいふ共みたりに腹立へからず我にまんくの
道理あぢこもぢ人まむきて聲高いひ響るは女にあらざるな
り古歌

よし此川水此心は、やくこも瀧の音にはたてじこ思ふ

吉野川は山川にて水早しうの川水の如く心は、やるこも瀧の水此
かしましきやうにこゑをあけてはいふ間敷なり

寛惠 第七

寛惠とは心ゆるやかよししてやわらかに人をめくみ物此あわれを
知て露此なさけをかくるをいふ

女は物を憐れみめくむ心あれば又堪忍の心も強きもれなり物残あ
りれみ堪忍此心なければ父母よつかへても男事へても不順とな
り大ひは義理違へて生きて世にあるかひなかるべし古歌に

あはれごとて人の心此情けあれや數ならぬまはよらぬなさけ残
人のつらきを恨み歎くとは上ろう下ろうのかはりもなきは數なら
ぬ心にも情けあれよこいへり人よつかはる、下女はした者なごは
卑しければ歌をころにまね常に此歌の心そのまゝろにあるへし
うれをめしつかう人なさけなかるへけんや

講學 第八

講學は學問して義理を講明するとなり女子の學問は婦徳をもつ
はらごすへきとなり

貴きも賤きも男も女も聖賢のいひたかせたもふこを書たる本を
讀されはまごの道しるへぎやうなしさいはひ世に大和小學女四
書列女傳鏡草なこいふもの平假名にてかき世もてあうへり人の
娘たさなきより是らの本を讀まてはかなふへからず古歌に

君か爲め祝ふ心の深ければひちりの御代此あとならへこぞ

此歌はみかごの御子へ太政大臣御本奉るこて詠ることなごきためて

論語孝經なごいふ本なるへし君は御行末長く御代榮へさせ給はんためは御本參らせて古へ此ひじり此御代にあごならばせ奉つるに増たる事はある間敷なりされば祝ひ奉る心深きゆへは何よりもた、御本を奉つるごなりひしぞや聖人の御事なり

菅相承の御母君は智慧ここに賢き人にてましますぞかや及第ごいふは儒者の智をみがき天か下此物しるにうなへしむることをいふなり之を及第狀元ごゆふ又落第ごてし損する人は大ひなる耻辱にする法なり菅家既に及第にのり給ふたりしも御母君

久方の月のかつらもれるはか刺家の風をも吹せてしかな

斯く詠し給ふ及第登るを月宮殿に譬へて桂の枝を手折らしめて名をえさせ度ごの御事なり菅家江家ごて我朝の儒家の貴き人ごなり給ふも御母君此根よく培ひ養ひうたて給ふ故なりごぞ

協稽姫鑑了

奥羽婦人傳卷之二

一名窈窕美譚

仙臺 佐澤 廣 胖 編述

佐竹侯夫人

佐竹義隆ノ夫人ハ同族淡路ノ女ナリ二子ヲ生ム長ヲ義所ト曰ヒ次

ヲ義長ト曰フ義長ハ本所ニ在リ義所ハ鳥越ニ居住ス夫人謂フ親ノ

慈ト子ノ孝トハオノツカラ人心ノ己ム能ハサルニ發スタ、兄弟ノ

友順ハ父母ノ教ヘニアラサレバ或ハソノ道ヲ失フモノアリヨリテ

義長ニ三日コトニ必ズ兄義所ヲウカ、ヒ風雨寒暑ヲ避ケズ敢テ怠

ルコトナカラシム又兄ニ弟ヲ愛シテ弓馬ノ技ヲ肄ハシム是ヨリ棟

蓐ノ愛ハマス、アツシ義長ノ性ハ多病ナリ老職梅津ソレカシコ

レヲ憂ヒ夫人ニ請テ曰ク左京君ノ三日毎ニ一タヒ世子ヲ伺ヒ友愛

ナ厚フスルモノマコトニ善ナリトスヘシタ、恐ラクハ幼ナフシテ
且多病ナリ風雨霜雪ノコトキハ晴日ヲ待テ到リ必ス限ルニ三日ヲ
以テセズシテ可ナリト夫人曰ク卿等心ヲモテフルマタ喜コブヘシ
然カレトモ吾ハコレニ異ナリ諸侯ノ朝廷ニツカフル豈ニ風雨霜雪
ヲ論スヘケンヤ苟シクモ幼ヨリ馬ニ跨カリ風雨ヲ避ケ霜雪ヲ犯シ
艱苦ノ境ヲ渉ルニアラサレバ以テ朝廷ニ奉スルニ足ラス今サイハ
ヒニシテ泰平ノ世ニ生レ未タ嘗テ汗馬ノ勞アラス三日一候ニオヘ
テナンカアラン卿ノ祖戰國ニ生長シ吾中將公ト、モニ甲ヲ環シ槍
ヲ提ケ風ニ櫛ケツリ雨ニ沐シ草野ニ暴露シテ備サニ艱辛ヲ嘗ム今
ナ距ル未タ遠カラス左京ハ幼弱ニシテ寒暑ヲオカストイヘレコレ
ヲ攻城野戰ノ勞ニ較フレハ顧フニ易々ナラスヤモシ其身寒暑ニチ
カサレ遂ニ夭殤ヲ致スハ天ナリ吾レ婦人ノ身安ソ子ヲ愛セサラ
ン然レトモ其ヲシテアツサ寒サニ涉ラシムル乃チ深ク愛スル所以
ナリト梅津等感歎シテ退ソキケリト

北條時頼ノ母

北條時頼ノ母ハ安達太郎ノ長子秋田城之介景盛ノ女ナリ松平禪尼
ト稱スカツテ時頼ノタメニ食ヲモフケテユレテ饗ス兄ノ義景來リ
タスケテ食具ヲオサム尼マサニ手ツカラ小紙ヲ裁シ障子ノ格子ニ
糊シテソノヤフレテ補フ義景他ニ命スル人アラント請フニカヘリ
ミス義景曰クコレヲオキナフハムシロ之ヲ新ニスルニ如スト尼曰
ク我豈ニ之レヲ知ラサランヤ凡ソ物ノ小破アルヤ宜シク之ヲ修補
スヘシ兒輩ヲシテ此理ヲ知ラシメント欲スルノミト義景感服ス世
人謂フ時頼ノ克ク勤儉ヲ守リテ政理ヲ得ルモノ亦タ母氏庭訓ノ然
ラシムル所以ナリト

賤女某

白河古城主小峰彈正少弼政朝文明十三年三月十五日鹿島祠前ニオ
ヘテ一日一萬句ノ連歌會ヲ行フ宗祇コレヲキ、遙カニ下向シ此會
ニ莅マントシ三十三間堂ノ前チスクタマ／＼賤女ノキタルニ逢フ

宗祇連歌會ノコトヲ問フ賤女コトフルニ滿尾セルヲ以テス宗祇ス
ナハナカヘルヨレヨリコトコロチ宗祇戻リト云フ時ニ賤女ノ綿
ヲ持チオレルヲミテ宗祇綿ハ賣ルカト問ヒシニ賤女ハソノ聲ニ應
シテ

逢武隈ノ川瀬ニスメル鮎ニコソ

ウルカト云ルワタハアリケン

宗祇之レヲ聞キ感嘆シテ曰ク東奥ノ賤女ハ亦タ此奇アリヤト

和田胤長ノ妻

和田胤長平太ト稱ス其妻氏名ヲツマヒラカニセズ建曆中胤長罪ヲ
北條氏ニ待テ陸奥ノ國岩瀬郡ニ謫セラル妻某氏思慕ニタヘズシテ
遂ニ茅鞋ヲウカチ千里徒步シテソノ地ニイタルステニシテ良人ノ
稻村ニアリト聞キ大ニヨロコビソノ鏡ヲ懷口ヨリトリイダシ殘粧
ヲト、ノフ人アリ告ケテ曰ク平太死スル既ニヒサシト妻慟哭シテ
地ニ伏シ遂ニソノ鏡ヲ抱キ水ニ投シテ死ス世人ソノ水ヲ鏡治トイ

ヒソノ地ヲ化粧原トイフ稻村ニ古石塔アリ平太佛ト呼フ

阿美津

阿美津ハ膽澤郡上衣川村ノ農作助ノ女ナリ父ハシメ天保荒凶ノ際
父母ヲウシナヒ傭作多年ワツカニソノ業ニヨリ婦ヲメトリ五兒ヲ
生ム阿美津ハソノ長女ナリ作助舊宅ノ地ニアラタニ屋敷椽ナムス
ブソノ地栗駒岳ノフモトニアリモツトモ幽僻ノトコロタリ文久元
年五月三日男寅吉タマノ病ムソノサマ駿痴ノコトク旦ツ吾家ヲ
オソレテ居ラズ日々近傍ノ炭ヤキ小屋ニ行テカヘラス父之レヲ憂
ヘスナハチ巫ニツヘテコレヲ禳フ巫曰クナンジノ子蛇ノ魅スルト
コロトナル禍ヒ七日ノ内ニアリユルカセニスヘカラスト咒符ヲ以
テ之ニ與フ六月二日作助夫妻雇作ノタメニイテ、ソノ程オノノ
三四里ノトコロニ行キケリ

阿美津ハフタリノ妹ヲ擁シテ留守シナニ心ナク夕飯ヲ炊キ井タル
ニ兒トモヲ俄カニ泣ク阿美津驚ロキカヘリ視レハ一蟒蛇アリ頭ヲ

アクル數尺走り來リシキミヲ越テマサニス、マントス阿美津極メ
 テ愕ロキ思ヘラクコノ物突至惡意シルヘキナリ我モシコレヲ斃サ
 スンハ二人ノ妹害ヲ受クル必セリト先ツ巨薪ヲトリテ之レニ擬ス
 蛇遂巡トシテ首ヲ縮メテヒキサルスナハチ出テ、コレヲ視レハ蛇
 ハ忽チ後壁ニヨリ眼ヲ張りテ睨ム阿美津キウニ鎌ヲ呼ブ二人ノ妹
 各オノ一鎌ヲトリ來リテ授クトリテ之ヲ擲テハ意ハスソノ右ノ眼
 ニ中ツマタ一鎌ヲナケウテハ左眼ヲ貫ヌク蛇ハ聲ヲ發シテ困苦轉
 輾口ヲ開キ氣ヲ吐ヤ吻舌火炎ノコトシ然シテ半身積木ノ間タニ在
 リホシヘマ、ニ其尾ヲ運轉スルヲエス傍ラニ巨木アリ壁ノ如ク柱
 ノ如ク排立セリ阿ミ津ハ力ヲ極メ其一木ヲ倒セリ果シテソノ首
 頸ヲ壓ス二鎌タメニ深入シ一柄折レツ、ヘテ五木ヲ倒シテ以テ背
 ヲ壓ス已ニシテ蛇力衰ヒス尾ヲ拔テ挺立シマサニ撃タントス阿美
 津サラニ大鐵「刀徑七寸重サ六百目」ヲフルヒソノ腹ヲ斫ルハラワタイ
 ツ鮮血淋漓蛇既ニ斃ルナホ逃去ランコトヲ恐レ繩ヲ以テ其頸ヲ縛

木同刀



シコレヲ桃樹ニツナケリ時ニ阿美津氣力因頓精神昏耗セリハシリ
テ家ニ入り被テ擁シテ臥スマサニ夜二更ナラントス父還リキタリ
庭上ノ狼藉ヲミ怪シミ問フテソノ實ナエタリユキテ之レヲ見レハ
蛇身長サ一丈一尺頸下ノ周リ一尺二寸腹ノ圍リ一尺六七寸脊色深
黒ニシテソノ腹ハ渥丹ノコトク尾ニ三刺アリ距爪ノコトシ翌朝妻
カヘリカラチアハセコレヲ苞ニシ負テ壑ニ投ス重サ百餘斤ト云フ
而シテ美津ノ病日ニ劇シク面目浮腫シ寒熱常ナシ醫ヲ延テコレヲ
見セシム夾旬ニシテ癒ヘス

作助フタ、ヒ巫ニツヘテ神ヲ降ス巫忽々蛇語ヲナシテ曰ク我數百
歳ノ物汝カ女ホシヒマ、ニ我ヲ殺スナンゾ其亡狀ナルヤト作助應
ヘテ曰ク君突如トシテ吾家ニキタル童女ナニチカ知ラン無心之レ
ニ應スルノミ且吾父作右衛門天保某年五月君ノ屬長七八尺ナルヲ
見之ヲ擊ツソノ後父死ス之君ノ屬ノ毒ニ觸ル、ナリ今ヤ吾女ヲシ
テソノ讐ヲ復セシムルナリト論辨再三蛇語終ニ塞カルオモムニ口

曰ク汝何ヲ以テ我ヲ待スルヤ作助曰クタ、命從ハント曰ク我ヲ蛇
王權現ニ祀リ時月祭りヲナセ則チ吾マタ祟リヲナサスト作助諾シ
テ去リソノ言ノコトクス

美津シタカツテ瘡ヘ弟ノ寅吉モマタ故ニ復ス郡正コレヲ嘉賞シ錢
若干ヲアタフ家々各々物ヲ賜フ且作助ヲシテ遺骨ヲ壑ニ覓メシム
アキトノ骨二塊ヲ獲タリ長サ各二寸許リ齒牙銳利ニシテ鋒尖ノコ
トシ十一月膽澤郡吏其狀ヲ縷述シ以テ聞シ二年正月二十三日仙臺
藩ニメシ賞金若干ヲ賜フ二月二日更ニ後宮ニメシ賜モノアリ侍女
亦タ物ヲアタフ四日公塗ニ見マタ賜アリコレヨリ士庶喧傳シテ贈
遺算ナシ阿ミ津蛇ヲ斃セシ時年甫メテ十五ト云フ

民間兒女相集リ各鎌ヲ擲チ其柄ヲ斫リ以テ勝負ヲ決ス之ヲ所鎌戰ト云フ先ツ倒ニ鎌
柄ヲ執リ數歩ヲ間テ、之ヲ擲ツ其鎌一轉シテ地ニ立ツ美津其戰ニ長ス其蛇眼ニ中ツ
偶然ナラスト云フ

野史氏曰嗚呼蛇之爲蟒不知其果歷幾百歲乎否也借令壯夫悍
卒睹之其能不駭魂喪魄而走避者幾希今也以一弱質之手一舉

戮之何其神而奇也。蓋天假之手以除患害也不然何斃之之容易如此也。然使其衷無斷然勇決之氣則焉能之。嗚呼阿美津豈不誠女丈夫哉。

烈婦阿澄傳

烈婦阿澄者羽前國村山郡大谷村平民島彌次右衛門女也。以文政八年八月生年甫十九嫁同村天滿神社人島外記生一男一女。嘉永五年外記與下社人櫻井某者爭社田訴州牧白河藩遂訴之於幕府皆不納藩吏納賄羅織外記之獄掠治極慘村民皆知其冤而莫敢爲白者至朋友親戚有欲絕交以免累焉會歲大饑米斗萬錢外記猶在獄中其費不貲而婦獨勤苦操行以給其用焉當此時仇家時外記之無也欲使賊窺其家奪所藏古記朱券婦覺之常懷匕首護之晝夜不怠冀幸要契之一合而夫冤之一白也而姦吏逞其毒不止卒誣以狂顛禁錮終身時安政二年也婦聞之痛哭殆絕擁兒秀直泣曰既汝年十一竟令乃父冤死獄中乎秀直感悟乃懷瓜數顆至獄

求見父獄吏哀許之而獄制甚嚴徒得父子相對悲泣耳此日秀直遂挺身奔仙臺欲依姻族某重訴幕庭某以其尙幼危不許不果而還婦益悵恨懊惱不能自禁時孟冬十月天寒風猛積雪踰丈一日婦獨棄兒空屋冒風雪奔投仙臺哀訴藩三伊達候々以其職辭婦慟哭于庭不止者數日觀者爲動容候亦感其至誠給三人口以居之爲請覈審於白河候往復數回三閱歲外記始得縱歸家於是深嘉其操行賜旅資婦歸而慮行路有變使十數人護送之且播告其事國中以獎勵士民云婦之歸家也伊達候與白河候議約三條曰赦外記曰歸爭地曰不問越訴罪然而背約定罪外記々々不得已重訴伊達候伊達候教之訟幕府外記乃赴江戶白河候聞之豫囑幕府逮捕外記下之藩邸獄而憚婦之越訴亦捕錮之婦懷幼兒就獄時兒生僅七十日婦在獄三年默座幽暗之中嘗無挫屈之色既而罹篤疾初婦自仙臺歸也婦慮後禍託兒秀直於仙臺姻家至是藩主果發緹校索秀直々々潛匿得免於是

聞母獄中病篤脫走江戶羸服潛行備嘗艱楚卒謁寺社奉行松平伊豆守訴冤陣請甚力秀直年甫十六自此之後外記之始始見審覈伊達侯亦爲申理之冤遂得白實婦之力也居數年婦復生三子皆男也外記既深慕伊達侯之義欲有所報會戊辰之師起朝廷勅以伊達侯爲討會先鋒於是慨然欲致身於國時九條澤醜三卿以朝旨新開督府於仙臺外記則募民兵自赴督府請加伍爲先鋒督府賞之賜寶刀一口暇待命當此時酒井氏出兵村山郡成寒河江柴橋二邑故幕府采邑也督府令外記掃之酒井氏取兵退外記父子既從軍婦散家財募兵且遣人謀敵情報之外記又時聚鄉黨親族子弟諭以順逆聽者感奮敵聞之懼且深愠外記既而外記抱節於陣峯敵放兵侵掠日囑白河藩吏索外記家族敵聞之先使家大避兵獨懷幼兒逃匿于勝生山中者十有餘日自謂今若就擒挫兒復讐之志不若暫脫身以爲後圖於是晝伏夜行跋涉數日遂投秀直於仙臺時奧羽越廿餘藩有所共議從約抗官軍仙臺其一也

官軍數不振秀直氣沮婦教秀直因九條氏宰藤井某竊通志於官軍隱忍待時冬十月廿餘藩盡降奧羽平然兵荒之餘邑里蕭條家無四壁婦處之夷然助秀直自措置家事動止如常人皆稱其操守明治十四年

聖駕東巡特旨賜金以褒其節義自此婦名益謄皆稱曰烈婦云

野史氏曰嗚呼婦可謂女丈夫也凡世稱志士烈夫者一遭屯難輓輓之時憤慨激昂死自潔或如可喜焉而其實無補於國家婦則不然以孑然孤羈之姿處孕室井泥之際從容處事會無迫蹙之容外扶夫內理家而兩不失其功嗟乎亦偉矣特至如綱常紊亂士人尙執惑之日毅然不違教其子以大義名分以全始終則其大節遠識卓乎不可尙矣哉明治十又八年乙酉四月山形縣編輯員御用掛宮嶋昇撰山形縣八等屬黑井小源太書

三澤初子略傳

初子ハ三澤氏ニシテ奥州ノ太守伊達綱村侯ノ母ナリ其先ハ貞純親

王ノ嫡統十二世雲州三澤ノ城主攝津守源ノ爲虎ヨリ出ツ爲虎ノ子
ヲ爲基ト曰フ爲基ノ子ヲ清長權之佐ト稱ス故アリテ浪々シ寛永十
六年因州鳥取ニ在テ初子ヲソノ再從弟三澤爲良ノ第二生ム母ハ朽
木兵部少輔宣綱ノ女ナリ初子年甫メテ十三ニシテ父母ヲ喪ヒ孤ト
ナリ叔母紀伊ノ養フ所ト爲ル紀伊ハ清長ノ妹ニシテ細川忠興ヲ介
シテ德川幕府ニ仕ヘ振姫ノ老女ト爲ル元和三年振姫ノ伊達忠宗公
ノ室トナルヤ紀伊仙臺ニ來ル三澤氏ヲ攜フ一日忠宗公三澤氏ノ容
姿絶美ニシテ旦ツ其怜利ナルヲ見テ之ヲ世子美作守綱宗ノ側室ニ
爲サント欲シ紀伊ニ謀ル紀伊對テ曰ク此女ハ今ヨセテ妾ノ所ニ在
ルモ素ト是名家ノ子孫モシ夫レ正室タラバ之ヲ諾セン其側室ノ如
キニ至リテハ改テ之ヲ辞スト公此語ヲ聽テ首肯シ明歷元年正月江
戶邸中ニ於テ婚姻ノ式ヲ行ナハルト云フ萬治二年三月三澤氏世子
龜千代ヲ生ム三年七月綱宗公故アリテ品川別邸ニ老セリ世子年甫
メテ二歲封ヲ襲ク綱村公是ナリ世子ノ諸父兵部少輔宗勝國務ヲ攝

シ政柄ヲ弄シ所謂胥壬徒黨ヲ結ビ專ラ宗家ヲ奪ハント欲シ姦計百
出至ラサル所ナシ三澤氏晝夜心膽ヲ碎キ局藤井等ト共ニ／＼世子
ヲ千辛萬苦ノ中ニ保持護衛シ自其モト、リノ中ニ寸分ノ釋迦像ヲ
納メテ護身佛トナシ以テ世子ノ祚ヲ祈百折撓マズ一心鉄石ノ如ク
男子モ及バサルノ堅忍ナリ常ニ局藤井等ノ名ヲ以テ身親ラソノ衝
ニ當リ艱楚萬狀言ニ堪ユ可カラズ後世ソノ狀ヲ演シテ淺岡ノ爲サ
ト稱スルモノハ往々三澤氏ノ爲ナリト云フ

寛文十一年伊達安藝宗重ノ盡忠大節ヲ以テ事始テ定ルモ是レ三澤
氏ノ確乎不拔ノ志ヲ持シ之ヲ護備スルニ非ズンバ百萬封土危ヒ哉
夫ヲシテ山獄ノ安キヲ得セシムル實ニ其力ヲ居多ナリ後々ニ侯ノ
封ニ國ニ着ヤ道中毎宿特使ヲシテ旅中ノ景況ヲ母堂ニ報道セリ是
レ其當時ノ恩ニ感ズル所アリテ然リト其書今尙前澤三澤氏ニ有リ
三澤氏後ニ又二男一女ヲ生ム曰ク宗贊將監ト稱ス宇和島伊達遠江
守宗利ノ嗣ト爲ル曰ク村和伊達美作守ト稱ス一門ニ列セラレ子孫

柴田郡河崎ニ在リ女ハ曰ク某中村某ニ適ク貞享三年二月卒ス享年四十八淨眼院殿ト號ス仙臺孝勝寺ニ葬ムル

三澤氏考妣ノ墓東京目黒正覺寺ニ在リ墓側ニ五輪塔アリ三澤氏菩提ノ塔ナリシカルヲ世人稱シテ淺岡ノ墓ト爲シ來リテ香花ヲ奠スルモノ今ニ至テ絶ヘス是レ亦タ以テ淺岡ノ爲ト稱スルモノ三澤氏ヲ知ルノ一端ナランカ

三澤氏ニ弟アリ宗直ト曰フ子孫陸中前澤ニ在リ三澤氏ノ卒スルヤ其所有品悉ク弟宗直ニ遺ラレ其諸品今猶ホ存セリ

元祿中綱村侯母君ノ遺命ヲ奉シ曾テソノモト、リノ中ニ納ル、所ノ釋迦像ヲ仙台東岡ニ安シテ之ヲ祭り旦ツ先妣當年鞠育ノ苦心ヲ感想セラレ親ヲ碑文ヲ撰シ之ヲ祠前ニ建テ以テ子孫後世ヲシテ其恩ヲ忘レサラシム其碑今猶存ス亦タ以テ當時ヲ想見スヘキノミ寛文ノ事固ヨリ國惡ナリ豈ニ口言フヲ欲シ耳聞クヲ欲スヘケンヤ況ヤ之ヲ記スルヲヤ且既ニ逆賊誅ニ伏シ正邪判然忠奸世ニ定論ア

リ復タ何ヲカ辨セン播レ厄或ハ稗史ノ材料トナリ或ハ劇場ノ筋書トナリ以テ江湖ニ傳播セルモノ多クハ之レ牽強附會ノ說ノミ後世遂ニ實歷トナルモ亦タ未タ知ルヘカラス況ヤ且ツ聞ク所ニヨレハ奇ヲ好ムノ論者バカヘツテ逆賊原田ニ忠績ノアルヲ見出シタリナト大ニ蛇足ヲ添フルモノアリト嗚呼マタ甚ダシカラスヤ願フニ二百數十年前ノ當時ニアリテハ上下攀ツテ之ヲ隱匿シ事ノ是非ヲ問ハス概シテコレヲ傳ヘサラントセシノ弊今日ニ及ビ有ル其實ハ現レス無キ其虛ヲ傳ルノカタムキアリケリ本會茲ニ見ルアリ嘗テ各家ニ就テ聊カ得ルトコロノモノナシトセスソノ口碑ト雖モ確信スヘキモノ或ハ筆迹ノ存シテ眞ナルモノニ至ツテハ蓋シ他人ノ附會臆想ノ及フヘキモノニ非サルモノアリ今マ其眞蹟自詠ノ國風五首並ニ古歌五首ヲ収釣ニトリ上木シテ茲ニ載シ且書面ト覺書ノ兩通ハ其文言ノミヲ載スルリ

初子夫人自筆書面並覺書寫

淨眼院様御筆四通 但宛名年緒詳ナラス(右包紙上書ノ文)

御書付の通見上參らせ候御尤に存上候只今も申上候通於常事指南をも致し御用立申度と存し候藤井事孝勝院様二世公夫人御代より久敷者も御座候得者局にも介添にも唯今迄召使務め候事に御座候まゝ左太夫藤井同じ様に召置れ下され候様に存上候小卷村尾事も唯今迄同じ事に御座候へは此兩人も引續き年寄と仰られ候か能く御座候松尾よしを事は將監殿主馬殿も仰られ候か能く御座候小川河せ兩人か中老頭に御座候へ共河瀬ことは少し年寄に御座候へは御前に出かけ申事なり兼候はんと存候まゝ於類様への介添に致度候半やと存候目出たく可祝

ふゆどしの書付に年寄六人と御座候は何れもれし合せ候て藤井申上候と存候小上臈事はいかにも召抱候はんと存候奉公人は澤山御座候へ共よろづ心もと無き故召抱へ不申候うけ玉はり合せあしき事も無御座候は、召抱候て能く御座候や伺へ參らせ候

覺

藤井も小卷村尾同様に可被遊哉又は局代の様に可被遊哉又と少し品御替可被遊哉年寄六人中老頭二人と御書付に御座候誰々に御座候哉の事

一待上ろう介副には誰を被遊候事哉

一大上ろう常被遊小上ろう御替なされ橋本左太夫母を介添になされ候は、少替申儀

可有御座早速仰下被様に仕度候事

夫人身ハ百萬封土ノ太守ノ室ナリ而シテ太守故アリ退隱通塞ノ身トナリ我兒ハ乃チ父封ヲ襲クト雖生レテ年僅ニ二歳是ヲ以テ國政ヲ諸父從五位下伊達兵部太轉宗勝及從五位下田村隱岐守宗良ニ委ス宗勝性良カラス國老原田甲斐宗輔ト結ヒ隱ニ不軌ヲ圖リ猥リニ非望ヲ覬覦シ既ニ先君ハ幽閉ノ厄ニ陷シ入レ機ニ乘シテ將サニ嗣君ヲ害セントス而シテ陽ニハ忠孝仁義ヲ揚言シ以テ太守ノ萬歲祖先ノ冥福ヲ祈ルノ舉ト稱シ宗輔ノ食邑柴田郡舟岡ニ於テ一大華鯨ヲ鑄造シ之ヲ菩提寺ニ納ム(寺鐘今移シテ登米郡米谷村ニ在リ)陰ニハ宗輔腹心ノ從臣鹽澤丹治ナル者ニ密旨ヲ含メ嗣君ニ毒食ヲ進メント欲シテ成ラス百方非ヲ飾リ惡ヲ掩ヒ詐誦百出暴戾逆肆至ラサル所ナシ天何ソ許スベケン神何ソ罰セサランヤ

寛文十二年月日伊達安藝宗重ノ盡忠大節ニ因リ朝廷嚴ニ糾察ヲ加ヘラレ奸黨悉ク誅ニ伏シ事始メテ定リヌ噫指ヲ屈スレハ先君退隱ヨリ茲ニ二十有餘年其間々夫人ノ身心ハ如何ナル慘情ヲ極メタルカ將タ如何ナル痛憤ヲ忍ビタルカ或ハ涙ヲ掩テ人前ニ咲ヒ聲ヲ吞ンテ深夜ニ泣キ其腸ヲシホリ其身ヲ紛碎ニスルカ如キ其憂苦酸辛實ニ名狀スヘカラサルナリ

夫人常ニ神佛ニ祈誓シ夙トニ釋迦像ヲ警中ニ收メテ自ラ護身佛トナシ且幼君ノ祥ヲ

祈リ一心凜然堅忍不拔心ヲ尽シ力ヲ竭シ以テ幼君ヲ千艱ノ中ニ護持シ遂ニ百萬ノ封土ヲ泰山ノ安キニ置クモノ豈ニ夫人ノ忠義其力與ツテ多ニ居ルト謂ハスシテ何ソヤ而シテ我臣僚巨萬ナリト雖モ扶翼其人ヲ得ル尤モ難シ獨リ老女藤井輩アルノミ豈慨嘆ニ堪フベケンヤ世人所謂淺岡ト稱スルモノアリ乃チ之ヲ擬ハルナラン歟次號ヲ期シ其傳ヲ記セントス

夫人常時幽憤ヲ洩シ國風ヲ詠シタルモノアリ乃チ藤井ノ遺族ノ家ニ藏ス今之ヲ双鉤ニ取リ上木シテ江湖諸君ノ一覽ニ供ス夫人自詠ノ和歌等ノ真蹟之ヲ一閱スル時ハ夫人其艱ニ處シ苦ニ堪フルノ情致紙上ニ溢出セリ且其筆勢渾渾適字體新麗人ヲシテ感激措カサランム是素ヨリ夫人才性自ラ天資ニ出ツルモノト雖モ抑モ亦涵養ノ素アルモノ想ヘ見ルヘキナリ嗣君年甫十六始テ封ニ就ントス先ツ江戸邸ヲ發シ每宿スナハチ必ス特使ヲ發シテ父母兩君ニ奉スルニ旅次ノ景況ヲ以テス母公ニ奉スルモノ一々嗣君ノ自書ニシテ今歷々三澤氏ニ存ス

夫人嘗テ警中ニ安スル所ノ卽チ護身佛後ニ嗣君其遺言ヲ奉シ元錄中躑躑岡中ニ一字ヲ創建シ自ラ撰文シテ石ニ勒ス

躑躑岡釋迦堂之碑

久成如來之尊像者。尊妣源初子。淨眼院了岳日嚴大姉。昔年以赤梅檀香木刻三分

寸尊像。所常護持而爲不肖綱村。祈禱壽圓滿也。尊妣每語云。後來須造常於城外。令貴賤觸順逆緣。乃是不肖增壽長福之基。莫加於此矣。尊妣辭世之後。常思之。占時有年。相所有月。遂築殿于城南躑躑岡。安置于此。而以成彼所願。且祈。

尊靈之無上成等正覺。凡所詣于此。令爲人母者。尊妣慈仁之志。各々爲子得除災叩禪。令爲人子者。習不肖誠孝之意。各々爲存父母。得減罪生善也。乃至一切所過此之人及牛馬之類。使觸緣結因而竟無一不成佛。

元祿龍集乙亥二月八日 奥州太守藤原朝臣綱村謹志

節婦ノ石墳

往昔奥ノ玉造郡磯田村ニ小林修理ト云ヒルモノアリ年壯ニシテ一

女ヲ舉ク赤貧ニシテ之ヲ鞠育シ難キヲ慮リ遠郡某氏ニ與ヘ爾來約

シテ互ニ音問ヲ絶ツ女ヤ、長ヌルニ及ンテ頗ル姿色アリ既ニシテ

某氏不祥打ツ、キ家道マス、窮乏遂ニ女ヲ倡家ニ鬻ル數年ノ後

修理事ニ由リ遠クイテ、一花街ヲ過ク妓春ナルモノアリ最モ容色

アリ遊人相競フテ之ヲ牽クト修理之ヲ聞テ心動キ乃チ樓ニ登リ

春ヲ召ス春壁ヲ隔テ、ソノ鄉音ナキ、心語シテ曰ク我ナンノ面目

アリテ再ヒ郷里人ヲ見シヤト俄カニ起テ身ヲ翻ヘシテ樓ヲ下リ病
ト稱ス假母怒テ曰ク我店ニ汝チカ輩ヲ畜フ多ク金錢ヲ獲ント要ス
ルノミ苟モ金錢多キモノハ僮夫馬卒ミナ嘉賓タリ汝チスコシク姿
容アルニ奢リ動モスレハ輒チ華家ノ法ヲ乱タル痛ク鞭笞ヲ加ヒテ
以テ後ヲ懲スノ鑑ミトナサント春迫リテ席ニ上ル明眸素齒楚々人
ヲ動カス客大ニヨロコビ果シテ聞クトコロニ背カスト手ヲ握ツテ
之レニ戯ムル春竊視シテ其父タルヲ認メ故ラニ知ラサルモノ、如
ク徐ムロニシテ客ヲアサムキ小用アリト起テ樓ヲ下リ石ヲ懷ロニ
シテ井ニ赴ムク姉妹驚キ呼フ家人奔走井繩之ヲ援フ則チ氣息已ニ
絶ツ矣時ニ明德元年某月日也既ニシテ脩理春ノ郷貫ヲ問フテ始メ
テロカ兒タルヲ知り悔恨自ラトクアタハス乃チ碑ヲ隣郷ノ栗原郡
文字村金剛寺ノカタハラニ建テ以テ其冥福ヲ薦ム郷人稱シテ菩提
石ト云フ徑九尺幅一丈三尺肖像一軀ヲ作り寺中ニ置ク高サ八寸持
子ノ文ニ曰ク

金剛院正外了體大姉

明德二年八月十九日

野史氏曰ク春ハ荒僻崇山ノ下ニ生レ村姥賤婆ノ手ニ長シ固ヨリ荆
釵布裙ノ人ノミ何ソ其レ受クル所ノ指誨ソヤ況ンヤ其一タヒ煙
花風塵ニ墮チ業ニ已ニ身ヲ賤行ニ辱シムルヲ豈ニ禮義ノナニモ
ノタルヲ知ランヤ春ノ如キモノハ節義天性ニ出ツト謂ツヘキナリ
一死タ、葬倫ヲ全フスルノミナラス亦タ以テ其平生ヲ掩フニ足ル
嗟乎古ヨリ節婦列女ノ難キヤ而シテ倚門笑ヲ賣ルモノニ出ツ嘆稱
スルニ勝フヘケンヤ

荒井氏賢母ノ教

法官ノ任タルヤ重シ之ヲ大ニシテハ死生存亡ノ係ルトコロ之ヲ小
ニシテハ得失利害ノ關ルトコロ古今オナシク然リユヘニ司法省大
審院始審裁判所控訴院檢事局等ノモフケアリテ其裁決公平至當罪
ヲウクル者ヲシテ遺憾ナカラシムナホ服セザル者アレハ之ヲ控訴

スルヲ許シ以テ覆覈スルアリ至レリト謂フヘシ
舊仙臺藩ニ荒井嘉右衛門從盛ト云フ者アリ吉村宗村重村三公ニ歷
仕シ法官タリ母ノ教誡ニ感發シ今越前ト稱セラル、ニイタル一偉
事アリ嘉右衛門ツ子ニ佩フルトコロノ刀銀ノカンサシヲ挾入ス其
母アル夜陰カニ之ヲ抽キ取リイツハリテ知ラサルマ子シ以テソノ
舉動處置ヲコ、ロム嘉右衛門亦タ敢テ辞色ニ見ハサズ心ヒソカニ
下婢ヲウタカヒコレニ注目スル手生ニコトナレリアル日母氏嘉右
衛門ヲ召シ銀筭ヲサツケテ曰ク凡ソ獄ヲ斷スルモノ其人ヲ疑ツテ
之ヲ詢鞠スレハ必ズ嚴ナリユヘニ苛酷ニシテ無辜ヲ陷井ルノオソ
レアリ疑ハスシテ其人ヲ詰問スレハ必ズ寛ナリ故ニ忽略ニシテ有
罪ノ者免ルヲ得ルノキヲヒ無キアタハズナンデ情實ヲ探知スルア
タハス無罪ヲウタカヒ有罪ヲ疑ハスワレ今ナンチノ法官ニ堪サル
ヲ知ル宜シクハヤク其官ヲ辞ンヘシト
嘉右衛門ハ對フルニ詞ナク遂ニ辞表ヲ呈出セリ藩侯之ヲコルサズ

強ヘテ本職ニ復セシム喜右衛門心力ヲツクシ情實ヲ得ルヲ以テ先
務トナシ藩下冤枉ノ民ナキニイタル賢母ノ教誡臆亦タ偉ナラスヤ
宜ナルカナ今越前ヲ以テ稱セラル、ニ至ル（越前ハ德川幕府ノ名刑官大
岡越前守忠相ヲ云フナリ）

編者曰ク今世ハ獄ヲ斷スル代言辨護ノ巧拙ニ因リ有罪ヲシテ無罪
ニシ敗訴ヲ勝訴ニ轉ズルモノ無キヲ得ズ況ンヤ貧人代言ヲ乞フ
ノ力ナク自ラ法庭ニ出テ、他ノ辨護人ニ對スルヲヤ且ツ裁判ノ如
キ姦人痴漢ヲ瞞着シ無罪ヲ以テ有罪トナシ者ノ如キ其情實果シテ
何如ソヤ嘉右衛門ヲシテ今世ノ法庭ニアラシメバ其心能ク安ンズ
スルヤ否ヤ噫

満子

満子ハ出羽庄内温海村ノ農民六右衛門ノ妻ナリ六右盲目多病子二
人アリ皆弱質ニシテ農耕ニタヘズ家事ヲ舉ケテ満子ニ委シ満子自
ラ任シテイトハズ且ツツノ姑年九旬起臥トモニ満子ノ扶助ヲマツ

満子之ニ事フルモツトモ隠シメリ姑平居ニ魚肉ヲコノメリ満子曰
ニ鮮魚ヲ買ヒ以テ之ニ供セリ姑食スルニアタリテ砂糖モシクハ給
ナケレハ食ハズ満子農ノ餘暇海苔サトリコレヲソノ料ニ充ツ木タ
嘗テ一日モ姑ノ意ヲウシナハズ

姑老耄ノ故ヲ以テスコフル不時ノモノヲダシム満子百万之ヲモト
メテ以テ供ス姑ヨロコシテ食シ嘗テ雪ノアシタニ侍ス姑満子ニ謂
テ曰クワレ百合ノ根ノ羹ヲ欲スト満子スナハケ銀ヲダツサヘテ山
ニノホリ飛霞粉々四望皓然狡兎スラソノ跡ヲ絶テテ堆雪脚ヲ浸ス
満子搜索ヤマズ百合ノ根ヲホリ得テ之ニ供ス一ダマダニワカニ命
シテ蕃薯ヲモトメシムマン子唯シテ起ケ松明ヲサケテ島ニ入ル時
マサニ三更ナラントシ人定ノ後寂然聲ナシタ、山犬ノ林壑ニ吠ユ
ルヲ聽クマン子少シモ怖レズ薯ヲ掘リ歸リテ其望ヲ成スソノ他此
ヲ以テ推知スヘキナリ

蓋シマン子ノ姑ヲ奉スル唯其歡ヲ承クルヲ以テ樂ミトナス是故ニ

姑満子ヲ慕フコ嬰兄ノ慈母ニ於ケル如シ其狀ヲ具シテ藩侯ニ達ス
因テ賞スルニ米ト物トヲ以テス時ニ延享元年ナリ

阿 豊

阿豊ハ山形縣羽前國鶴岡ノ人井伊某ノ女ニシテ大淀川村天野某ノ
婦ナリソノ行爲勇マシク大丈夫ニ愧サルトコロアルヲ以テ人呼テ
女丈夫ト云フ夫ノ家モト富豪一夜盜アリ面ヲ覆ヒ刀ヲヒツサケ曰
チャブリテ入ル一賊タ、デニ夫ヲ柱ニ縛リ白刃ヲ喉ニ擬シ却ヤカ
シテ曰ク財アラハコトクク之ヲ出セ多言ヲモチヒスト二賊サラ
ニソノ前後ヲ擁ス夫戰栗シテナストコロヲ知ラス奴婢ヲモマタ畏
縮スルノミ

阿豊ヒトリ奮然トシテ蹶起シ手スキニテ両袖ヲ約シ白布ニテ額ヲ
ツカ子長刀ヲ取り大ニ詈シリテ曰ク鼠賊ナンゾ亡狀ナルト賤等大
ニ怒リ之トタ、カフ阿豊突嗟ニ一賊ノ面ヲ撃ツ乃ケタオル餘賊大
キニオトロキ刀ヲステ、走ル阿豊之レヲ追フ暗夜ソノアトヲ失ナ

ヒ賊ヲ得スシテ歸リタ、チニ夫ヲ扶ケツノ縛ヲトキ事ノ由ヲ聞ケ
岡ノ警察署ニ訴フ警官來リ賊屍ヲ檢スルニ刀痕鋭利ニシテ毫モ款
斜ノ狀ヲシミナソノ手鍊ヲ稱ス警官役夫ニ命シ賊屍ヲ假理セシメ
阿豊ノ壯烈ヲ賞歎ス明治十五年三月十日ナリ時年甫十八阿豊妻
色アリ平生嫺々衣ニ勝ヘサルモノ、如シ此ニ至テ人初メ其勇力
ヲ知ルト云フ

阿榮

阿榮ハ桃生郡寺崎村ノ農若山三之助ノ妻ニシテ同郡中津山村ノ農
佐々木源兵衛ノ次女ナリ三之助生レツキ軟弱ニシテ多病ナリ耕耘
ニタヘス常ニ提灯ヲ製スルヲ以テ業トナス家モト貧ナリ阿榮兄兼
助ト、モニ耕作シ夜ハ裁縫ヲ勵ミ鳴後ニイダツテ後ケ止ムシカシ
テ明朝ハ早起シテマツ夫ノ欲スルトコロヲ問ヒ後ケ調理シテ之ヲ
ス、ム夫ツ子ニ生魚ヲ嗜ムコフテ之ヲ供ス又清潔ヲコノム毎日ツ
レユキテ錢湯ニ浴セシメ身浴室ノカタハラニ在リ冷温ノイカンヲ

問ヒソノヨロシキニ從カヒ心意ヲヤスンセシムミナ裁縫ト耕耘ト
ノ餘ニ出ツト云フ

阿榮嫁入スルトキ年十六應應二年四月二十日夫七十一歳ヲ以テ卒
スソノアイタ終始一日ノ如シ隣里ソノ行ヲ賞歎セサルモノナシ嘉
永五年仙臺藩ノ太守樂山公代官富松惣右衛門ナシテ賞金ヲ賜フ阿
榮ノ夫卒後明治二年七十一歳ヲ以テ終フト云フ

節婦阿辰此傳

節婦阿辰ハ陸奥北國志田郡坂本村の住仙臺藩番外士鈴木八五郎か
娘なり八五郎齡すてに四十餘未たよつきあらば某氏の子を養ふす
こふる凶虐ついに之を逐ふついて某の次子八太夫なるも此を女に
配して後の嗣となす夫婦なかよくいつしか女子をまうけいご睦ま
しく暮しけるがあやにく八太夫癩病にかゝり膿血ごころくに出
て人にも逢がたき様になりければ父八五郎はいたくこれをにくみ
嫌へて八太夫を去まぐほししばし辰にひひ諭せども辰は貞節を

守りて父に言うけかはす答ひけるやうは一度かく夫婦となり子さへいて來たればうを病のためにうから離て女の道立へきかは此事ばかりは父の仰せなれ共えうけかひ侍らすこいよ／＼ねもあつに夫の病をあつかひけり八五郎は聲をいこふと甚たしくさま／＼の事を巧めるを辰は早くもつかひ知りて父君かくまで八太夫をいやみ玉ふをうのまゝ過しつるは誠この不孝なれば八太夫と共にすまひを異にすへしこいふて近きあたりのちいさき家を借てうつりにけり

八五郎なやもにたへず我ひごり娘をいかてか癪病かたゐのした薙になすへけんこ晝よる思ひ計りつひに一の悪計を考んかへ出たしぬある夜八太夫か住める隣の家に忍び入りひぎかき米俵をこりいて、わざと米粒を八太夫か家のいり口まで散しつゝけて盗み來れる様にこしらひけり隣家の主じたま／＼來りて八五郎に之をきたる八五郎き、て心ひうかに悦こび其盜賊はすなはち我聲に八太

夫にそういなし速に訟い出つゝをしご促かせしに隣家の主じは頭をふり否此し事決して八太夫殿れしわきなき露ばかり思ふものかは必ず／＼訴たへなご起させ玉ふなご打返し／＼留むれど八五郎更に聞入なくうの米つぶのこほれ落たるこゝろ證據なれ天罰なれかゝる罪人を片時たゞごも捨置へき様やあるとかつ怒りかつのしり遂に仙臺府城ののり訴へにこゝろ及びける

斯て仙臺には評定所てふなる者ありやかて八太夫殘捕はしめ是を訟延に召出しまつ八五郎の具狀して告訴したる如く第一に隣家の米殘竊盜したるとまつを糾さるゝに八太夫ねろき其か母土の如く慎んで唯まれ無きといふ辭氣大に人を動ものあるのみならずとに檢證の端緒なし官また盜は其眞に非る疑ふ是ににいて其妻辰をめあろれ次第を詳らかは質さんものゝ招喚狀殘を廢せらる辰は之を披きみてつら／＼思へけるよふ父に言るか誠なぞと申せば夫をえて冤枉の罪に當らしめ又夫にさる事なしこいへば父に反

座の科を受けしむるなりかゝる浮瀨は落人からは迎も浮はんす
へはあらず命を捨てん後は事明らかに治るへしこ必を定め實家
ゆき母に向へ八太夫留守此間は要心此爲なればさて重代の脇刺一
腰を借受くるに母は神ならぬ身此心つかすれ、こいへて貸渡す
う辰はねし戴き是ぎ一生此御別れ先立つ不孝の罪ゆるさせ玉ひこ
せきくる涙隠しつゝよそなから暇乞して立出る心此中を哀れなる
既にして辰は附添へ仙臺は登る親類此某は曉き近き頃支度、の
へ辰の宅を呼懸くるに何の答へもなければ扱は母の所もあるや
と尋るに母の元はも居やらず母も心し元なく思ひ親類のもれ一同
は来り早く出よかしと聲かけしに絶て答なきをあやしみて臥間戸
をねし開けはあはいが貸渡したる脇指もて幼女をさし殺し自か
ら咽をつき斬り血しるは染み懷中は一書を殘して死してけり
是は正保四年四月十四日此事なりこそ人々痛く驚ろき馳せ曲りて
事の由を村長に告しかば村長も又郡代に申しけり郡代は悉しく探

り尋ねられしに如何か諷聞れけれ共辰は貞節を守りて一命を棄た
りしを深く愛てさせられ八五郎反座れも仰られ又八大夫が身
もとなくて病の床に起き臥しおつゝも齡を保ちてまかれ刺けるこ
ろ

今は昔二百余年此前なからも節婦か心の苦さを思ひやられてたき
る涙はえ止めあへず爰に又孝心こいふへきは癩の病は血脉を引て
子孫は傳ふるなれば幼女を刺きて病の根を絶ち親家を汚さぬこ
そいみしけれ辰は孝貞は世の人此齟齬もならめかしと爰は是を
紀るをこいふ

書ねきの文並辭世の和歌

拙者ここゐの度御城下表へ召し登さるれもむき御指紙紙以て仰せ
渡され候處恐ながら親の御訟訴のを御尋よこれあるへく依て親に
一同不申上候へは親にたいし不孝の罪遁れかたし身の置所なく父
母に先立つふ孝の罪是非は及はずかやうは相果中候夜道を急ぎ候

石碑 上臺高六尺一寸 幅一尺三寸 碑四尺四寸 方四分 二尺一寸 幅七寸
 志田郡坂本村曹洞宗九谷山天性寺節婦之墓

附錄

曰貞婦可也。胡節平哉。

矣。今阿辰一死。而既白夫冤。又宥父罪。世保母子。而婦之義也。
 婦非阿其身。則不能下之。至難也。至難也。難云。我一人。而欲為貞。
 從夫違父。是天之下。至難也。至難也。所以無輕重者。一也。而有時。平欲孝。不貞。

贊論

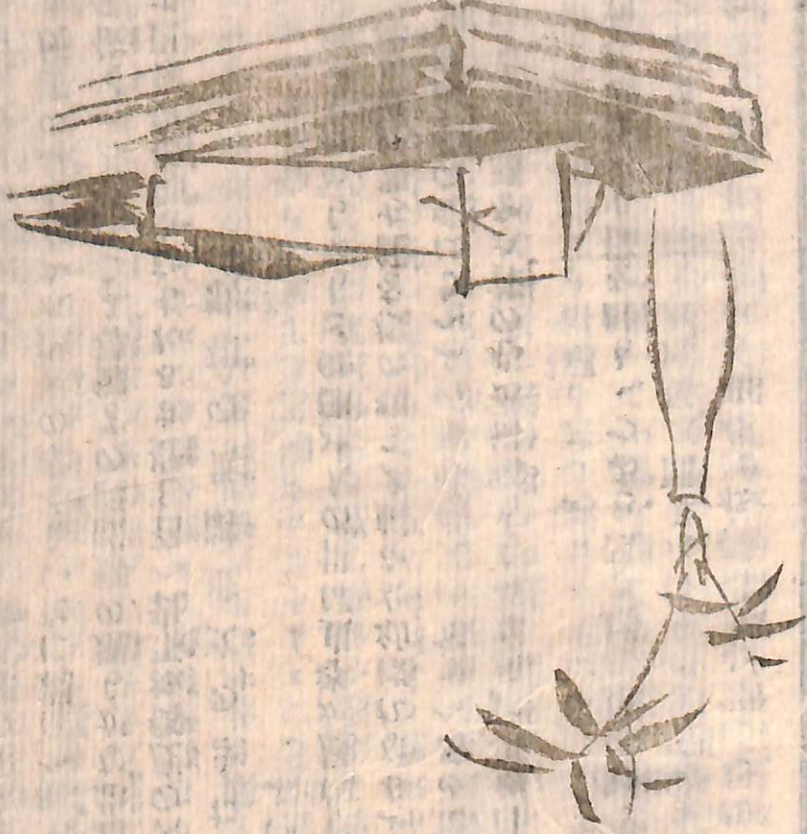
齋藤拙堂

ちりなん後春をわすれす

咲花ほこも旅路急くこも

四月十四日曉 生廿七歳

ま心任せず此事の書殘し申候以上



節婦鈴木氏辰之墓

業轉成善信女

正徳四年甲午四月十四日 守節死

三本木驛路傍碑

節婦の墓に此より廿丁余坂本村天性寺中にあり

碑陰

往昔。鈴木氏女死節。先君義之。封墓且賜金。永供祭祀。縱有節婦之操。而無先君之明。孰得如此情乎。歷平之久。知者鮮。薄元里。忠之有日。遠與保土原行泰。森直定。熊澤正持。佐藤信岑。鍋田俊庸。白幡成昌。桐ヶ窪親邦。宮澤實等。相謀立碑路旁。以示行人云。

安永三年七月望日

田邊希元撰

薄信義書

正徳四年九月廿九日 仙臺藩申渡書

御郡司支配在郷御番外鈴木八五郎

其方事。養子八太夫無實の罪品々申懸。竊盜仕候由偽り訴申出候。訴に被答候已後。其方聲八太夫妻自害に及び候。畢竟其身惡事を企及故如事。此り候不仁不義之罪のみならず。上を欺さ候仕形其犯科重疊之死罪道へからずと雖ども。八太夫妻自殺れ情を感じ思

召しにため死刑一等を減し牢朽に行る、者也

御郡司支配在郷御番外 鈴木八五郎妻某

夫八五郎事。養子八太夫の罪を訴可申と。金候砌其方事右の所行不宜存候に付。相可然八五郎に申聞候。得共八五郎引承不仕品々御詮議の上。相聞候依而此段は不及御沙汰候。且娘辰八太夫妻父の惡事夫の事共申出に。ひす夫に隨ひ候へば。父に背き父に隨ひ候由へは。惡事にくみし夫をすつ此間に在るて身を置所なく。つて自殺に及へ。志近來なる節婦と感し思召る、所なり依て一生救ひの扶持被下置者也

御郡司支配在郷御番外八五郎養子

鈴木八太夫

養父八五郎義其方惡事有之品々訴へ申上ると雖ども御詮議之上其實事なり。因て不及御沙汰候

八五郎娘 鈴木たつ

御構無之候事

志田郡坂本村曹洞宗 天性寺

去四月其方寺内に葬り候。鈴木八太夫妻辰事。度父八五郎事。右八太夫妻惡事之品々申出候。砌八太夫妻自殺し及候。右心底父の惡夫の事共申出るに。夫に隨へば父に背き父に隨へ。惡事に組し夫を捨此間に於て身は置所なく自殺に及候。さし折々積なる節

婦と感し思召さるゝ所なり依之寺内に石碑を被立下候條水々斷絶せざる様に此趣と
も鄭々置へさす

一御扶持方三人分御郡奉行支配在郷御番外鈴木八五郎妻爲御扶持其身一代被下置候間
帳面へ記し置當月分より御格之通相度候様可被申渡候右八五郎儀節を守り自殺に付
右之通母に御助扶持其身一代被下候條如斯志摩在所の暇不能申候以上

正徳四年九月廿九日

將監

刑部

外記

兵庫

金須藏人殿

野村藏負殿

清水主税殿

坂本平右衛門殿

松岡新左衛門殿

一壹判金拾五兩木戸源六郎に相渡首尾可被申渡候右源六郎支配在郷御番外鈴木八五
郎儀及養子同苗八太夫妻を守り自害之を志田郡坂本村天性寺にほうむり石碑
を被建下りの爲追善之被下置候間源六郎より天性寺へ相渡候様令し尾候に付、斯
候以上

正徳四年九月廿九日

將監

刑部

外記

兵庫

出入司衆中

覺

一在郷御番外鈴木八五郎娘たつと節を守り自殺に付之志田郡坂本村天性寺に葬り石
碑被建下候様に評定所に於て天性寺へ爲申渡候石碑被建下候始末木戸源六郎方にて
令首尾候様に可被申渡候寸法之義は直に田邊喜右衛門へ承合候様可被致候石碑之文
体紙之通り候事

一筆は永倉逸平書詞候様御小姓山直に源六郎方より申渡候様致されべ候事

一石碑依被建下爲めに銀子五枚被下候屹度

上より被下候様子に無之源六郎心得を

以て遣事に可申渡候事

九月廿九日

右之通外記殿御宅に於て出入司野村藏負被仰渡候事

節婦阿辰詞

磐溪大槻崇

男氏乃吾父良人吾所天吾天却被我父誣人倫大變莫甚焉告
實如父奈不告如天何欲全天興父之際一死之外更無他人室
刺其子白刃貫咽死鮮血淋漓迸戶外哀痛一書泣天地嗚呼世
間滔々人盡天節烈如辰有幾乎

孝女勘ノ行狀

我カ同シ村ニスミ馴シ農夫與吉トナン云フ者ノ娘カン女ハ幸ナク
シテ早ク父ニ別レヒトリ母ニ事ヒマツリヌ弟ニ勇七ト云フ者アレ

ト生レツキ身弱ニシテ人並ノ働ナラズ自ラ朝夕ノ煙モ薄ラキケル
ニソ勸女ハ鋤鋤ナト執テ田畑ノワサニモ力ヲ盡シ母ニヨク事ヒ弟
チイツクシミオノコニモ勝ル働キシテケリカ、ル事共漆山ノ縣司
ニ聞ヒアケ、レバ子モコロニ仰コトアリテ米數多賜ハリシハ勸女
カ三ソチ四トセノ夏ナリキサアリシ後ハマスマス心ヲ盡シ勵ミマ
レト生座心ニ任セス農事ノヒマニ豆腐ヲコシラヘ冬ハソレヲ氷ラ
セナトシテ夜ノ更クル迄モイテアヘス母之チイタハリテ程ヨクナ
サメト戒シムレハソカ言バニ隨ヒトモニ打臥ヌアルハ母ノウマ眠
リセシヲ窺ヒ起キ出テ業ナトル時モアリ日コトニ東雲ノ頃ヨリ豆
腐ヲ近キ村サトニ賣リアルクナ常トス母ニハ喜ブ物ヲ參ラセ己レ
ハアラノシキ物ヲタフヘケリ先ニ縣司ヨリ賜ハリシ仰セコトノ
書モノチカシコミ敬マヒ奧マリシ處ニヒメオキ朝々餅イヒナト備
ヘテ神ノ如クゾ恭マヒケル公コト書タル高札ノ下ヲユキ、スルオ
リニハ雪ノ朝タモ雨ノ夕ヘモカブリ物ヲヌギケルヲ何事ニヤト人

ノ問ヒケレハ公ヲ崇メ仰セコトヲ忘レヌ爲ナリト對ヒケルトカヤ
勸女ハ母ノイマサン程ハ餘所ニハカシツカヌト心ニ誓ヒテ髮ヲト
ギオノコノ様ニカヒ結ビヨソオヒ飾ルコトヲナサズ常ニ世ノサカ
ヲ言ハス身ノ幸ナキヲモ語ラズ立居ハ靜カニ詞ハモ和ラカナリ母
ヤミヌレハ藥師ハサラナリ神佛ケヲ祈リ顔貌モヨノ常ナラズ弟ニ
モ能カシツヤ護ラセ我カ身ハヨモスカラ寐ヌ時モアリシトナリコ
トシ卯月ニ縣司ノ見回リタマヒル時ニ再ビソノ孝行ノ奇特ヲ譽テ
モノ品ヲ賜ハリケリ外ツ國ノ郭巨ハ母ヲ養ナハン爲ニミトリ子ヲ
埋メマホシ今ワカ村ノ勸女ハ母ヲ養ナハン爲ニミトリ子ノ髮ヲキ
リシ事ソノ孝行ハ同シカルベキナン因テヤツカレ常ニ見ツ聞ツシ
タル事共カヒツケ多クノ人ニモ告シラシメハヨキ勤メニモ成ラメ
ト斯ニモノシヌ時ニ嘉永六年丑ノ四月二十一日羽州村山ノ郡黒澤
村百花園主人

工藤眞葛傳

眞葛は仙臺の人只野伊賀の後のめなり初めふみ子こよぶ工藤平助

(諱ハ篇光字ハ元琳球卿ハ其號仙臺藩ノ待醫ナリ林子平ト親善海國兵談序文ヲ撰ス)

のむすめよて生れつき心高くもの毎よさとし歌をよみ文かくわざもよくせり平助は江都にをれりはしめ伊賀公に仕へてしばし陸りければ二なき交わすなしけりさて伊賀妻を喪ひ一人あるを聞て平助已がまなむめもて是につかん事を母のめがしけり伊賀にも魚こゝろの水ありされど何とにも憤み深き本しやうなれば容易くうけかはさりけり平助ふれぬかだらひ眞葛も思ひわびて

かきたふす人しなけれは徒らに

身は埋み火と消えんごすらむ

こよみけり伊賀この歌をみ斯やさしき人ならはいかてはしたなき事有らんこて許しけりさりけれと眞葛はなや父の元に住せけりかくて任みちて國に歸るまに成りぬれば其由平助に告て眞葛をは先きに下しけり只野家には右族輩集合て待設け、まうの人々の

中よ見も知らぬ女ありて出迎へけり此女伊賀の元のめよ能も似を
れは家のうち皆戦れ慄げと眞葛は斯とも知らさりけり

頓てかたの式終りて人々退きしのちも傍らに有ければ今は眞葛も怪まと思ひて御みは何人にて何の爲まか前より此は居ますうご問へは此れみな眞葛をつくく見て涙を浮めいふ様己れ先に此家の本妻に備りてをの子一人を持ちろは御身先は盃を賜わしわらわなり子を思ふ心の闇誰か愚かならん殊更に哀しくていかて善人となし父の名をも汗させじと育てけれと宿世拙なくて思ひし事は水の泡消て果なき苔の下埋もる、身に理もれぬ思今度御身の入り來り玉ふと聞て悦びにたへす見の侍るなりあはれ母なき兒を便なしとねばせ我子とれりして育て、給へこの後は御身にも餘多あらん身は夜路にありても必らずまの幸を祈るべし唯此一言を申さんため耻かしき姿をも忘れてと言指てよ、と泣けり
眞葛も袖をしりあへず暫し言葉も出てさりけりや、ありて我父

の元にありて猶いとし子を殘し玉ふと聞けり父の言ふも人の後
は行ては先の忘れかたみは則ち我子なり構て淺間數心を持てこ
固く戒めけり自らも此ことをば違へし心は誓ひをたて、けり若
もや我腹も出たらんには左提右攜してちりも隔てはせし去れど
世はま、子憎みご云この無にしもあらじ葦の穂綿は薄き情け魚
つる池も厚き氷のたくひ數ふるも及ひたゆければ後めたうなほそ
る又宜ならざるにはあらねど人は人にこそよれたれもく去ひた
ふる心ある物かは家つ人も色に溺れ聲に耽りてめ、しきかこに迷
ふ心なごはよも有らじを此は我よりも御身こそ能知り玉ふならめ
必ず心を惱まし迷ひを殘したまうな早く淨土へ趣むかせ給へと懇
ろに諭しける

あやかしはさも嬉しけれ面持して手を合すこ見えしが煙の如く
消失てかすか残る燈火の光のみのみ淋ごも又哀ごも云んかたな
し次に有合ふ人残呼ひ祠堂に到り香をたき花を手向け前に誓ひし

ことを重ねてのはへけるごなん

後よこの後妻には子出ずして前妻のを産れ如く痛はり育てけり此
兒人なり名を圖書と呼養はれし恩殘忘れず實ごの母のそくつかへ
て孝道怠る事なかりしは今世までも人のよく知る所なを眞此
著りせま餘多文有れやそかうち松嶋紀行、七濱めぐり、及び、紅蓮尼
の傳、世に傳れり五城樓下舒嘯山人河田瀨織記るす

瘦玉女史

女史名ハ馨字ハ清婉通稱ハ茂登瘦玉ハ其號ナリ千葉六黨大須賀四
郎胤信ノ嫡流元享三年相馬氏ト同シク下總ヨリ東下シ岩城ニ留リ
大久ニ館ス後降ツテ農間ニアリ是ヲ女史ノ家系トナス父ヲ貞藏ト
云母ハ菅波氏弘化三年五月磐城國楡葉郡田ノ綱村字舟門ニ生ル天
性靜淑容止閑雅幼ヨリ相馬侯夫人ニ仕フ年十ヲ筠軒先生ニ配ス先
生家塾ヲ開キ經史ヲ徒ニ授ク夫人素ヨリ書ニ嫻フ是ヨリ日講義
ヲ聽キ會心默契スル所アリ牢記忘レス熟徒常ニ就テ遺忘ヲ質ス傍

手取大生空み玉貞
 不染塵垢心空所
 契寫生一家在
 波玉め保題



ラ墨蘭ニ巧ミニ兼テ詠絮ノオアリ大槻磐溪其詩ヲ讀ミ之ヲ評シテ
 曰ク佳人配才子琴瑟和合欲其詩不善可得哉ト其先生
 ニ事ル敬重柔和ニシテ其婢僕ヲ使フヤ温和慈惠ナリ鍼繡諸技ニ至
 ツテハ一モ能セサル者ナシ實ニ婦德ヲ備フト謂フヘシ明治四年ノ
 秋肺疾ニ罹ル在再愈ヘス五年ノ春東京大病院ニ就キ治ヲ乞フテヤ
 、愈エ十年ノ秋病再ビ起ル十一年ノ秋治ニ須賀川病院ニ就ク遂ニ
 起タス實ニ十月二十八日ナリ享年僅ニ三十三其郷舟門鷹巢山ニ葬
 ル辞世ノ詩アリ曰ク空臥病床八十日。秋風夜雨客懷寒。枕頭
 明滅殘燈影。埋骨家山夢裏看。ト先生ノ哭詩ニ曰ク與病而來
 興戸還。秋風一路淚潛々。汝若有知可無憾。慇懃埋骨在家
 山。ト何ソ其淒愴ナルヤ女史子ナシ先生ノ猶子ヲ養フ愛字慈育至
 ラサル所ナシトイフ遺稿若干アリ今中ニ就キ五七律絕數首ヲ摘錄
 ス亦以テ其人ト爲リヲ見ルヘシ

題自畫蘭二首

點。檢。群。花。卉。古。香。無。若。君。却。生。空。谷。裡。風。露。護。幽。魂。
愛。君。幽。艷。質。寫。出。幾。圖。看。不。學。臙。脂。筆。嬌。紅。畫。牡。丹。

步高青邱韻

柳。外。柳。外。柳。花。前。花。前。花。行。尋。花。柳。路。春。色。在。君。家。

大沼枕山曰：好古樂府。

春盡日外君憶在仙臺

千。里。關。山。入。夢。頻。飛。花。風。雨。送。殘。春。別。君。幾。日。無。消。
息。杜。字。聲。々。愁。殺。人。

警溪曰：宛然唐韻。

赴東京道中

處。々。殘。梅。雪。樣。飛。黃。昏。微。雨。濕。鶯。衣。遙。々。與。病。離。鄉。
去。一。路。東。風。草。未。肥。

病中

一。自。驚。蛇。影。沈。綿。歲。月。移。相。親。惟。有。藥。不。怪。人。無。詩。

晚。稻。雲。連。畝。新。蕎。雪。滿。堤。田。家。秋。當。好。夢。趁。野。人。期。

又

筆。硯。委。座。絲。連。旬。廢。畫。眉。霜。深。楓。色。老。風。冷。雁。聲。悲。
陣。藥。煎。愁。後。殘。燈。照。夢。時。傷。心。無。限。事。惟。有。枕。衾。知。

與兒晉

愛。汝。垂。髫。影。春。風。好。丰。姿。免。懷。纔。數。歲。又。哺。在。何。時。
鄉。學。攜。書。讀。遊。場。斫。竹。騎。慙。慙。庭。訓。意。大。器。晚。成。期。

兵後

兵。後。家。園。侍。少。筵。寥。々。霜。色。冷。秋。天。詩。如。悉。蟀。吟。逾。
苦。窓。似。芭。蕉。裂。不。全。空。郭。松。高。餘。鶴。唳。故。溪。水。淺。露。
魚。肩。全。家。幸。免。戰。塵。厄。新。月。一。痕。明。酒。船。

病中夜吟

一。臥。深。閨。病。未。平。外。君。懇。說。禁。詩。情。小。眠。也。結。慈。親。
夢。微。志。常。存。牡。馬。貞。瓶。挾。菊。花。燈。有。影。池。埋。楓。葉。水。

無聲滿胸不耐多今思獨坐秋窓更明。

暮春

綠上簾帷樹影橫殘春時節在京城身飛燕歸猶
遠病似流鶯瘦自驚墨水烟花都是夢柳風笛亦
傷情近來全絕家鄉信忍聽新鵲月下聲

奥羽婦人傳卷之二畢



明治三十五年十二月廿日印刷
明治三十五年十二月三十日發行

著作兼
發行者

佐澤廣胖

仙臺市小田原高松通二番地

印刷所

玉田舍

仙臺市小田原高松通二番地

印刷者

八嶋虎治

仙臺市小田原北一番丁通十番地

發行所

香雪精舍

仙臺市小田原高松通二番地

